

東西文明の比較 (7)

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

7月10日の読売新聞に、「草船が運んだ日本人」というタイトルに続き、「3万年前の大冒険」とのサブタイトルの記事がありました。すわっとの思いで読みました。

イベントの目的は、日本人の祖先が約3万年前、中国大陸と台湾が地続きの頃、どうやって日本列島にたどり着いたかを体験しようというものです。

旧石器時代には、丸太をくり抜く道具がありません。そこで草を束ねた「草船」で移動したと仮定しました。今回の実験は与那国島から西表島までの約75キロ。しかし、残な

がら今回は失敗しました。強い黒潮に押し流され、人力ではムリでした。

このイベントには、人類学者・海洋学者・探検家など20余人が参加したそうです。注目したのは、このイベント費用を、インターネットを利用した「クラウドファンディング」で集め、約2か月間で2,633万円も集めたことです。それだけ「日本の古代」に関心を持つ人たちが多いことを知りました。そこで、今回は、縄文時代から遡って日本の旧石器時代に触れたいと思います。

日本列島は約3万年前に始まった。

日本列島の文化遺跡からは10万年以前の石器などが発掘され、人類が存在したことが分っています。日本列島は酸性土壌のため、その頃の人骨は残っていませんが、3万年以降の後期旧石器時代の人骨は静岡県豊橋市の牛川町、浜北市、三ヶ日町などから発掘されています。

また、大分県聖岳洞窟からは旧石器と一緒に人骨が出土しました。研究者によると、この人骨は骨が厚く、後頭部の形などが北京郊外周口店の上洞穴出土の上洞人骨に似ているといえます。その後、沖縄本島の具志頭村港川から発掘された人骨が約

18,000年前のものと判明しました。これらは華南の柳江人(広西壮族自治区柳江県)に類似しています。おそらく氷期の海面が低下した時期に古モンゴロイドの一部が、中国大陸南部から沖縄や西日本に移住したと思われます。一方ではこの古モンゴロイドが沿海州方面から北海道・東北地方へ流れ着いたことも証明されています。この二つの古モンゴロイドの集団は相互に異なる文化を担い日本列島に住みついて、その後の縄文時代を築く「原日本人」となりました。

日本旧石器文化はいつ頃から始まったのか。

「旧石器文化」という呼称は、ヨーロッパでは約1万年以前の時代・文化を指す言葉として定着し、アフリカ・印度・東南アジア・中国などでも定着しています。日本旧石器文化の探訪は1949年に考古学に興味を持った一人の青年によって発見された一片の石器から始まりました。群馬県桐生市に近い「岩宿」遺跡です。岩宿遺跡から出土した土器は、24,000年以前の物と確認されました。この発見以来日本全国では3,000箇所以上の旧石器の遺跡が発見されています。

日本列島で最古の遺跡は宮城県北西部の江合川流域に連なる「座散乱木・馬場壇・中峰遺跡で約14,000年以前のもので、発見された石器にはナウマンゾウやオオツノシカの脂肪が付着していました。また使用痕(動物の角や骨、皮や肉の加工・調理)が認められています。これらの石器を使用していたのは、地質学でいう中期更新世(プライストシーン: 氷河時代)にあたる時期で「旧人」が生存した時代。北京原人と同じ原人が日本列島にも存在していたのです。この時代の海面は現在よりマイナス100～70mでしたから現大陸からは容易に日本列島に来ることができたと思われます。

日本列島の自然は現在のそれとは全く違っていました。東北から中部地方の山地には「針葉樹林(亜寒帯性樹林)」に、関東・東海から西日本地方の低地は冷温帯落葉広葉樹林に覆われていました。長野県北部の野尻湖立ヶ鼻遺跡(4～2.4万年前)からはナウマンゾウとオオツノシカ、岩手県南部の花泉遺跡(2万年前)からは野牛やオオツノシカ、ナツメジカ

などの獣骨が発見されています。花泉遺跡からは中国北部から北上した動物群とシベリアから南下したものが共存していたことが分っています。日本列島への道筋が2本あったことの証拠です。

石刃技法の登場。ナイフ形石器とその生活文化

今から22,000年から21,000年前、九州鹿児島火山(桜島)が大噴火し、その火山灰は関東から東北地方にも降りそそぎました。その火山灰の層を「始良層」という日本の旧石器時代を測定する基準にしています。東京の西、武蔵野台地には関東ローム層という赤土の地層があります。国際基督教大学(ICU)の敷地内で発見された野川遺跡はこのローム層にあります。ローム層は厚さ4メートルに及び10の文化層で構成されています。その中に2層の黒土層(始良層)があります。最深層(3.2～2.0万年前)からは粗雑な石刃石器・斧形石器・礫器などが、2層(2.0～1.3万年前)からは石刃石器・ナイフ形石器・尖頭器・彫器など多様な石器。3層(1.3～1.2万年前)から細石刃石器(ナイフ形石器は消滅)。4層(1.2～1.0万年前)から両面調整尖頭器(石槍)を持つ石器群が発掘されています。

ここで注目されるのが最浅層から突然「石刃技法」が出現したことです。原石を加圧して石刃を何枚も剥ぎ取る技法で、一度に数多くの石刃を得ることができます。ナイフや槍先にも使うこともできます。石材には黒曜石が最適。黒曜石の原産地は限られます。東京の武蔵野台地にある野川遺跡から出土した石器は16000年前までは箱根産、それ以降の石器は長野県産の黒曜石でした。この時代に200キロを超える広域圏の交流があったのです。

石刃技術の発展でナイフ形石器が量産され、日本列島全土で普及します。ナイフ形石器文化といわれ、ナイフ形石器が優先する関東以西と彫器とナイフ形石器が併用された東北以北に二分した文化圏ができました。

旧石器時代の住居とは

北海道の中本遺跡や長野県の駒形遺跡には浅い竪穴状の遺構の中に炉跡が発見されています。大阪河内平野の羽曳野丘陵はひきのの北にある「はさみ山古墳」に

は、東西6・南北5メートルの楕円形の竪穴住居があります。13～14本の柱で上屋を支え、住居の西隣に炉跡があります。ナイフ形石器などが238点も発掘されており、住居が生活の拠点になっていたことがわかっています。

細石刃文化と大陸文化との交流

ナイフ形石器が主体の旧石器時代は13000年前ごろ終わります。ナイフ形石器に変わって登場し、細石刃石器が日本列島に普及します。小さな石片を骨や角や木の軸に溝を掘って小さな石片を埋め込んで樹脂やアスファルトで固定(植刃)させて槍・鋸・ナイフとして使います。この細石刃式用具は世界の広範な地域から発見されています。

日本では長野県野辺山高原の矢出川遺跡と新潟県荒屋遺跡があります。しかしこの両遺跡が示す文化は、石材や石器の組み合わせ、更には細石刃技法が全く異なります。矢出川遺跡の「円錐形(または角柱状)の細石核を持つ文化」は関東・中部南部・近畿・中国四国地方に分布。一方荒屋遺跡の「クサビ形細石核をもつ文化」は中部北部・東北・北海道地方に広く分布。クサビ形細石核を用いる細石刃文化はユーラシア大陸のシベリアで生まれ、モンゴル・中国北部・朝鮮半島など東アジアで発達しました。「円錐形細石核文化圏」と「クサビ形細石核文化圏」という2つの文化圏が関東・中部地方を境にしたのでしょうか。

関東以西の旧石器時代人は細石刃を取り付ける新式槍の着想を受け入れるが、細石刃の製法や石器の種類を取り合わせは従来の「自分たちの伝統を守る」こと。東北・北海道地方は新しい細石刃文化がナイフ形石器文化に取って代わったのに対して、西日本では、古い在来の文化が新しい外来の文化を受け入れて、在来文化の伝統を変容させたのです。この「異文化」の誕生には自然環境の差異があります。約13000年前から日本海の気候変動が始まりました。対馬暖流が徐々に流れ込むようになり海水温が上昇し、冬には雪が降るようになりました。日本海沿岸は氷河時代のような大陸的な寒冷で乾燥した気候が湿った空気で覆われました。その結果、ブナやナラ